

■増田さかへさん(増田助産院・助産師)

「男か女か」などといわれながらも
人に支えられて生きてきました

女性が職業を
もつのは生意気？

むかしは、女性が、それなりに世に出たいとなったら、助産婦か髪結いなどになるしかありませんでした。ですから、助産婦になれば、ひとりでも生きていけると思っただけです。

小学校6年のときに戦災に遭いまして、正式な成績なんてものは、なくなっていました。それで、なにもないままいなか疎開。戦争のじめさは、今の若い人にはわからないでしょうね。人生が、まったく変わってしまうんだもの。

それで疎開児童というのは、みんな高等科へ進んだのです。そうしたら6・3・3制に切り替えとなり、新制中学校というものができました。

でもわたしは、母が再婚したので父が違ったのです。それで、お父さんのお金では進学したくないという強情をはって、助産婦さんの家に弟子入りしたのです。とにかく男尊女卑の時代。女性が職業をもつことさえ、生意気だと言われるくらいだったのですよ。

学校でわたしは、どっちかかというこ

男の子に負けてない子でした。たとえば男子の庭の掃き方がダメと言って窓からバケツの水をぶっかけたりしたくらいです(笑)。

だって、わたしたちが廊下を一生懸命拭いて、机を運んだりしているのに、男の子たちは、みんな竹ぼうきで校庭を掃いて、べちゃくちやオシヤベリなどしていたので頭に来て、ぞうきんバケツの水を窓からかけたりして、それで男の子が恐いって言うてました。

卒業のときには、男の子が、「一度聞きなかつたことがある。おまえは男なのか女なのか」と言われたくらい、オテンバだったのです。

恋など
するひまもなく

家庭の事情もあって、自分で助産師になると決めたのですが、苦勞はしましたね。

最初は助産婦さんの家で修業をして、それから静岡へ帰ってきて、市内のある産婦人科に住み込みとして入りました。

それから県主催の保健婦養成講座を友

人とふたりで受けました。たしか2回生か3回生だったと思います。

いまは、いろいろな資格が国家試験になっていますが、あの頃は、まず検定を受けて、それから保健所に採用され、働きながら国家試験をとりなされたのです。

わたしは、3回ほど書いて3回読むと本が頭に入る人でした。それで、助産婦・保健婦・看護婦の資格をとりましたが、その勉強のせいで、それこそ恋もできなかったくらいです(笑)。

18歳で保健所に入り、20歳で結婚、結婚出産を働きながら乗りこえてこれたのは、夫が理解のあるいい人だったからです。勤めながら第1子を産み、第2子ができて保健所をやめました。

それから助産院を開業。途中、改築をしたのですが、夫いわく、俺は、2000万も平気で借りるような、そんな図太い女と結婚したおほえはない。

保健所で働いているころは、授乳時間というのがあり、午前と午後30分ずつ家に帰っていました。男性の事務長さんが理解のある方で、とても親切な方でした。わたしは恵まれていたのです。



洗濯機もない時代の
育児

子どもが生まれるまでは、大きいお腹のままで働き、患者さんの家に自転車で回るようなことをしていましたよ。当時は結核の患者さんが多かったですね。

そのころは、働く女の人はあまりいませんでした。結婚して働くというのは、やはり大変な時代で、婦長さんは、「結婚なんて不潔だわ!」って言うていたりしました(笑)。ですから妊娠すればみなさん辞めていきました。

わたしの家は、十数人の大世帯。食事の支度だけでも大変なことでしたが、忙しい中で支えになったのは、子どもをみてくれたおばあちゃんだったり、夫だったり。夫は大きな農家のお坊ちゃんでしたから、黙って勤めに行つて、なにひとつ文句は言いませんでした。

わたし、もちろん家事・育児も一生懸命やりましたよ。洗濯機が入ったのは、途中からです。オムツなど、みんな手で洗って干して…。冬など、洗濯物は片っ端から凍ってしまいますからね。

朝早く起きて洗濯物を干しておき、授乳のためにお昼に帰宅すると、やっと水がきれて、洗濯物がひらひらするようになっていました。洗濯機がない生活など、いまの人には考えられないでしょう。

ですから、いまでも赤ちゃんを訪問したときに、どんだん言います。「お母さんダメ。こんなの洗濯機に入れちゃって。ウンチはちゃんと落として、洗ってから入れましょう」。うるさいおばさんですね。いまの人、紙オムツをぼんぼん捨てるでしょう。赤ん坊は、いくらむれないといっても、やっぱりむれます。だから、きれいに洗ってあげてください。ほんとうは手で洗って、やわらかいオムツを使ってあげたいものですよね。

いままでは保育園も、すぐには子どもを預かってくれない時代でした。それです。かつては自分も、子どもを預かってもらうところがなくて、働くのを断念

した経験があるからです。

しっかりと

生きていける力を

女性は、昔とそれほど変わっていないかもしれないけど、自己主張もするようになったし、経済力もついてきたと思います。

変わらないのは、母親とか主婦であるという自覚をもっていること。たとえ働いていても、そういう気持ちをもっている女性のほうが多いと思います。働くことは、けつして悪くない。家庭に目が向いていればいいと思います。子育てのシステムも、しだいに整いつつありますしね。最近では、父親が助産院に来るようにもなりました。ですから、子どもは母親が育ててくなくてはいけないと思うときもあります。

大丈夫、心配することはありません。進

学問題とかいろいろありますが、大切なのは、子どもが自分の力で生きていけるようにすることではないでしょうか。

自分より子どもが大事という気持ちもわかりませんが、よそへ出したその子が、ちゃんとみんなとなじんで、しっかりと生きていけるようにして社会へ送り出す。それが親の役目だと思っています。そう思えるようになったのは、わたしも歳をとってきたということでしょうね。でも若い人だって、自然に思うようになりますよ。

大切にすること

大切にされること

こうして振り返ってみると、人の生活環境は、ずいぶん変化してきましたね。ご近所の人たちが、親しく仲良く暮らす

とかいうことも、少なくなりましたね。

でも、いくら自立心が大切とかいっても、自分ひとりで生きていけるわけがありません。自分なんて、じつに狭いもの。ですから、隣近所も大切にしないとね。

わたしが今日までやってこられたのは夫がいて子どもがいて、家庭があったからです。自分にとってこれは大変に修行になりました。でも、自分が好きで選んだ道ですから、それほど大変だったという気はしていません。

わたし、女らしいところなどなにもなかったけれど、それを世間が認めてくれたので、女に生まれてよかったと思っ

■久保寅雄さん（トンボヤ社長）

たかがファッション されど…… それは生きかたの証明

自分で服を縫う 時代から

わたしは、昭和28年に父の跡を継いだのですが、そのころは、ほとんどの女

性が、花嫁修業として洋裁・裁縫などを習っておりまして、カジュアルなものは布地を買って自分で縫う時代でした。トンボヤは、そういうお客さまを対象に服地屋を営んでいました。

しかし、仕入れた布地を売るだけでは



たのは、昭和30年のこと。それがご好評をいただいたので、百着ほど売れたこともあり

当時、既製服はツルシンポ（ハンガーに掛けて売ることからついた俗称）といわれ、粗悪品というイメージが強か

ったのですが、静岡で気の利いた二次製品を扱っている店が少なかったため、製品を出たのかと思います。そのうちに、製品を仕入れないと間に合わなくなり、こうしていまの土台ができていきました。

むかしは、靴屋さんは靴だけ、靴屋さんは靴だけという商売でしたが、服飾関連商品をトータルで扱うブティックが誕生したのは、高度成長期の真つただ中、70年代後半から80年代にかけてでした。もちろんわたしごども、いままではトータルにファッションを提供しております。

靴下ほど女性は強くない?

かつて、「戦後強くなったものは靴下と女性」と言われたことがあります。しかし、靴下はたしかに丈夫になったようですが(笑)、女性はそれほど強くなったか。女性政策がらみの法律制度などは変わりましたが、世の中、つまり人間そのものは、あまり変わってないような感じがいたします。やはり男性優位社会が続いているのではありませんか?

ファッションというのは、男性にとっても女性にとっても、ひとつの自己表現です。もちろん、それを後押しするトレンドというのがあります。ほんとうにご自分に合う色を自覚しておられる方は、そんなに多くはないでしょう。流行に合っていれば、あるいはブ

ンド品を持っていけば安心という感覚の方が、まだまだおられるような気がいたします。他人の価値観に惑わされずに、自分の気持ちで休まるものを持つ。そんな自己表現があってもいいはず。ところが、ファッションに限らず何十年経っても、人はさほど変わっていないようですね。

わたしは、エスニックを基本とした店づくりをしておりますが、なぜインドまで仕入れに行くかというと、日本ではすでに見られなくなった、手の込んだ手工芸品が作られているからです。そういうこだわりのある商品は、インドでもそう安くはありません。しかし、そういう商品を置く店を増やしていくことが、商店街にお客さまを取り戻す一つの方法になるかと思えます。

たとえば、神田の神保町がなぜにぎわうのか? それは、専門性を貫き、こだわりを大切にしている本屋さんが多いからでしょう。このように、なにか欲しいと思ったとき、ファッションであれ、飲食店であれ、そつだ、あそこへ行けば」と、その店名が浮かんでくるような商店街づくりができると思います。あの店に行かないと、めづあえない一点を扱うお店を増やしていくことが、商店街の活性化につながると思います。

妻には頭が上がない

商店街の移り変わりで思い出したのですが、自分たちの街に対するこだわ

りというものは、世代が変わることに薄くなっていくとも感じます。

父親が苦勞して作り上げてきた店は、息子にとっては、「あつてあたりまえ」だと思えます。そういうわたしだつて二代目です。もし父が生きていたら、「欲がない」「おまえは七間町のこと、なにもわかつていない」などと言われるのかもしれない(笑)。

むかしは、店の番から住み込み店員の食事の世話まで、休む暇なく働かねばならないのが商人の妻でした。この店のおかみさんも、従業員の結婚、恵比寿講や正月行事、その他の生活相談にいたるまで、店で働く人の面倒をみていたのです。

わたしの妻も、若いころはそれに似た暮らしでした。ですからこつまでやつてこられたのは、ほんとうに妻の支えがあつたからこそです。育児、家事、従業員の世話、家計のこと、いたるまで、ほとんど独力で背負つてくれました。

しかも住居と店がいつしよです。従業員も家族と同じようなもので、夫婦二人きりになる時間なんて、ほとんどないのが実態でした。ですから、いまの気持ちは、ともに闘つてきた戦友のようなものですが、妻には頭が上がりません。

お互い、許しあい我慢しあつ。こつもあるがままに受け入れる。わたしも相手をいたわることができるようになったのは、ようやくこのころになつたのです。お互いに歳もとりました、心配になるわけです(笑)。

あなたにそれは似合わない?

戦後60年を過ぎて、ほんとうにさまざまなものが変化してきましたが、こつファッションのセンスとなると、世のなかの変化ほどには変わっていないような気がします。

「馬子にも衣装」とばかり、なんでも着せられるままにしているのは、センスは育ちません。どなたにも好きなものと嫌いなものがあるはずですが、それらを上手に選択していくことで個性が育っていくでしょう。しかし、センスを磨くのは、難しいものです。いろいろな方法はありますが、もし美しさを追求したいのであれば、自然に同化し、自然に学ぶのが一番ではないでしょうか。

商売柄お客さまを拜見しておりますと、お買ひ物の決定権は8割がた女性がおもちですね。これも世代によつて変わつてくつあるとはいへ、下着・靴下からネクタイ・スーツまで、ほとんどを母親が妻に任せている男性もおられます。

「オレ、これにするよ」と決めかけても「あなたに、それは似合わない」と言われると、男性は買ひのをやめてしまつ。女性のアドバイザーに従つてしまいます(笑)。若い世代でも、そういうタイプの方は少なくないですよ。そもそも自分では着るものを選びたい、こつだわりをもつ男性は、おひとり店にやつてこられます。そういうお客さまはお姿を見ただけでわかりますし、商品を見る目も厳しいです。

相手を思いやる心

最近では、男女とも自立ということがよくいわれますが、「この人は、わたしがいないとダメ」とばかり、夫や子どもの面倒をみる女性は、結果的に男性の自立を阻害していることになってしまっています。

そのときは、お世話をする充実感をお感じになるかもしれませんが、第二の人生になって、男性に自立心が欠けていたら、逆に負担になるかもしれません。さんさん飼育しておいて、「60歳になったら、もう自立して！」では、ご本人も途方にくれるかもしれませんね(笑)。

たかがファッション、されどファッション…装いというものは、ひとつの自己表現であり、その人の生きかたの証明ともいえます。

素敵な人というのは、身だしなみ、言葉遣い、笑顔など、トータルで好印象から生み出されてくるものです。ファッションだけではなく、相手の気持ちをさりげなく感じ取っていく感性なども、とても大切ではないでしょうか。

他人に不快感を与えないこと、相手を

思いやる心をもつこと。男女共同参画とか人権という難しく考えがちですが、夫婦であれ友人であれ、それを基本にして人間関係を磨いていくことから、いい人生が始まるのではないかと、わたしは思っております。

■杉田至朗さん(元・新聞記者)

まだまだ心は鎖国状態？ 「生きること」をみつめて…

戦後のトップランナー として

私は昭和22年生まれ、団塊の世代です。ですから、自分たちは「戦後のトップランナー」という自覚のようなものがありますね。

あの時代は、ほんとうに子どもが多かったです。一クラスが50人以上で、教室は先生が通るすきまがないほどでした。

でも、わたしたちの時間はなぜか十分にあり、活気もありました。街の中が自分たちの空間でもあり、楽しかったですね。

フーテンの寅さんのような露天商や

バナナのたたき売りの口上など、何度聞いても飽きなかった。紙芝居もありました。

女の子は、道路でゴム飛びやケンケンパなどで遊んでいました。女の子も男子の遊びに加わって跳び回っていました。

まだまだ戦後のままで、貧しい家も少なくなかった。いつも同じ服で登校してくる友人もいました。でも、なにやら得意なものがあれば、それを互いに認め合い、いまのような、いじめは少なかった。たとえば、だれかドッジボールがうまいとか、足が速いという、憧れのようなものさえ感じました。先生も新しい時代を迎えて非常に熱心でした。

しかし、親からも先生方からも戦争の

話を聞かされたことは、あまりありませんでした。ただ、父は満州から復員してきたのですが、よく上官から殴られた思い出を語り、飲むと軍歌を歌っていました。

中学・高校では部活動が盛んでした。いまでも、当時の仲間とは、つながりがあります。高校では、一般的に女性のほうが成績優秀だったと思います。大学進学者も増えつつありました。

大学時代は学生運動の真っただ中。ノンポリのわたしは、運動に加わることはありませんでしたが、入試当日は学生を閉め出したりして、大変なものでした。



体系が崩れるのは まずい？

卒業すると新聞社に就職。体力的には大変でした。たとえば、夕刊の終了が午後2時前。それから昼食です。ですから朝は、腹持ちがいいものをつかり食べておかないとたない。朝刊勤務の時は帰宅が深夜。仕事のテンションを引きずっていますから、すぐには寝つかれない。そこで床に就く前に空腹を満たし、アルコールを入れて…というような生活が続きまして。

もちろん女性記者もいましたが、人数は多くはなかったです。しだいに数

は増えてきましたが、ただ支局に女性記者を一人で配置するのは危険だという考えはありますね。

また、こんなこともありました。

高卒の女性は、テレビ・ラジオ欄の担当と決まっていたのですが、中には意欲もあるし能力も高い女性編集者がいて他の仕事も任せたいと上司に相談したところ、一刀両断に「駄目だ」「高卒の仕事は決まっています、それに見合う給料を出している。その体系が崩れるのはまずい」と言っただけです(笑)。今思えば、その当時は、それが当たり前の考え方だったのでしょうか、私は納得できず上司と議論になりました。

保守的傾向が強いのは男性

わたしは、妻に先立たれて十数年になります。自分で家事を続けていることもあって、共働きの女性には敬意すら感じるくらいです。

戦後から振り返ってみると、精神・経済の両面を含めて、女性の自立心は高まってきました。妻も、子どもの手が離れたら外に働きたいと言ったことがあり、それは、専業主婦としての彼女の自立心の芽生えだと思えました。しかし、その後すぐ体調を崩してしまいました。仕事で、日本人の青年海外協力隊、また静岡県人が援助している海外の貧しい子どもたちの現状取材したことがありますが、海外でのNGO活動を支えているのは、多くは現地の女性たちでし

た。それを見て、まだまだ日本の女性の社会参加・貢献は遅れていると実感しました。

海外旅行者の数は急増しているようですが、残念ながら、日本人の心は依然として鎖国状態にあるように思います。しかも保守的傾向、偏見が強いのは女性よりも男性ですね。

生活者の言葉で話し合いたい

公的なことでは、いくつかの審議会などにも参加させていただき、貴重な経験をしてきましたが、目の当たりにしたたて割り行政には、じつに無駄が多いと落胆しましたし、しばしば憤りも感じました。

また、そうしてかわった男女共同参画施策は、どうも使う用語からして無理があると思えました。「男女共同参画」という言葉は、諸事情による妥協の造語と聞いていますが、いかにも官僚的で一般への浸透が難しい。学者の方々が主導してきたせい、まずは言葉そのものが、生活から遊離しているといつても過言ではないでしょう。

生活の原点にあるのは、きわめて原始的ともいえる男女の問題です。その生物学的な違いのことなどをあいまにしたまま、「ジェンダー」などの用語が独り歩きすると、最も基本的で大切な課題がぼやけてしまうような気がします。

恋愛にしても結婚しても、そのほかの他人への思いにしても、その根っこ

にあるのは、いとも動物的なもの、あるいは集团的無意識のようなものだと思ふのですが、そういった部分を置き去りにしたまま、社会的な働きだけの視点から男女の性差を分けてしまうと、理念に市民はついていけないし、実生活と結びついていけません。ということは、問題の解決が置き去りにされやすいのではないか、ということですね。

男女共同参画とかジェンダーという言葉の裏には、「人権」という極めて大事な概念があるはずなのですが、それがぼやけてしまつて、表面的な差別の現象に目がいきかねません。

問題を矮小化せず 歴史的視点から

じつは健康を害して、55歳で早期退職の道を選択しました。いまでも体にしびれなどの後遺症があり、心身の障害

人が生きていくとき……
忘れたいことや
つい忘れてしまつたことなどを
いろいろ抱えがちです
けれど
忘れたくないことも
いくつがあることでしょう
忘れたくない経験……
あなたにも
なにかありませんか？

者手帳も持っています。自分に障害があるから言うわけではありませんが、障害者と健常者の間にはっきりとした境目などはありません。

そして社会には、男女差別以外にも、さまざまな差別がひそみ、それらはみなつながった問題のはずなのです。ですから、それを個別に問題視してもうまく解決できない。女性差別・障害者差別・高齢者差別・職業差別・外国人差別その他の根っこは、すべて同じだと思えます。

一人の人間の生命の尊厳、つまり「いま、生きていること」をどう考えるかということなんです。男女共同参画とかジェンダーについていうなら、その問題を矮小化・極私化しないで、グローバルな視点から、また歴史的な視野をもって、まず自分自身の人生を考えてみることにしたいと思います。生活者として生きてきて、そこに物事のスタートがあるのだと思いを強くしています。

それは明日をつくり出すために
きつと
大きな勇気になるはず
そのさまざまに
語られざる記憶を
次の時代を生きる人たちに
せひとも
伝えていきたいものですね